

仏教という生き方 -「信仰と癒し」というテーマをめぐって-

ビハーラ会員 鷹巣町 龍泉寺住職 佐藤 俊晃
平成13年7月20日 鷹巣阿仁広域交流センター

民俗・キリスト教の立場からのお話と続いてきた「信仰と癒し」というシリーズの第3回目は、当会事務局長としてのみならず、ビハーラのシンクタンクとしても信頼の厚い佐藤俊晃師よりのお話です。

これまでのシリーズを振り返りながら、救いや癒しを求める人に対して、あらためて仏教の立場からどういう応え方ができるのかというお話をいただきました。

はじめに

をご承知おきます。

昨年（平成12年）、佐々木宏幹先生がビハーラ公開講座「日本人の死生観と癒し」において私たちに喚起していただいた課題に答えようと、「信仰と癒し」を共通のテーマに掲げ、今日を含めて三回のセミナーを企画してきました。

一回目は、民俗研究家・斎藤壽胤先生の「秋田の民俗信仰と癒し」。二回目は、外旭川病院のホスピス病棟医長・嘉藤茂先生の「あなたらしく最後まで過ごしていただくために」。それぞれ民俗信仰の立場から、また医療の立場から、という設定で「信仰と癒し」に関わるお話を聞いてまいりました。そして今日はその三回目、仏教の立場からこのテーマをどう考えるかということで、私にお鉢が回ってきたのです。

ただ私は専門の仏教学者でもありませんし、仏教の立場を代表して言うことなどとても出来ません。敬虔な仏教徒というには、はるかかけ離れ、妻帯し飲酒もしてしまう、たいへんいいかげんな、かつ経験の浅い職業僧侶です。ですからこれからのお話は仏教の立場から、という大上段に構えたものでなく、一般の人よりはいくらか仏教にふれる機会が多くあり、自分の信仰というものを問いただされたとき、かなり後ろめたいながらも、まずは「仏教です」と答える程度の人間が話すものだということ

【「癒し」の意味するもの】

この時期、「信仰と癒し」というタイトルを掲げると「あ、たぶんこんな話だな」と察する方は少なくないんじゃないでしょうか。現代社会は「癒しブーム」と言うのだそうです。耳ざわりのいい音楽や森の香りのアロマ、癒し系グッズに癒し系美人、クラゲにイルカに心のヒーリングと、まさに「癒し」はブームの最盛期にあるようなこの頃です。

これから私がお話ししてゆくスタンスを明らかにしておくために、まず「癒し」について現在一般に理解されているおよその枠組みをご紹介します、次いで先行して行われていたビハーラセミナーにおける斎藤先生、嘉藤先生、そして佐々木先生のお考えを私なりに整理しておきたいと思います。

a 「救い」「治療」「癒し」

「癒し」は、社会・文化のいろんな場面で注目されていますが、この癒しのはたらきを、きちっと問題化してクローズアップしたのは、文化人類学という学問領域においてだったようです。文化人類学者である上田紀行氏や弓山達也氏ほか、文化のあらゆる面における「癒し」のはたらきを追及

しています。そこでここでは弓山達也氏の著作から、癒しについての記述をご紹介します。ここでは「癒し」とともにその類似語である「救い」「治療」という言葉もとりあげられ、それぞれの違いが整理されています。宗教の立場から「癒し」について考えようとする今日のセミナーにとってよき手引きとなると思います。

「もしあえて救いと癒しとを分けるならば、教義に基づいた知的な救済の働きかけ、つまり生きていく意味を知的にわからせる働きを救いとするのに対して、生きていく意味を体で「感じる」「実感する」働きを、狭い意味での癒しとすることもできよう。もちろん救済の現場においては、この二つの働きははっきりと分けられるものではない。

医療の現場でも癒しは注目され始めている。それは身体を機械としてとらえ、病原をメカニカルに取り除こうとする近代医療の身体観・人間観に対する反省、および人間を全体としてとらえていこうとするホリスティック医学の台頭と軌を一にしている。というのも癒し(healing)という語は健康(health)、神聖な(holy)、健全な(hale)という語と関連をもつことから、癒しが健康や神聖なものとの関わりをもつというのは容易に理解できる。だが、癒しは、また全体(whole)とも語源(holos)を同じくする。その意味で、癒しを単なる宗教的な病気治しの意味に限定せず、むしろ人間に対するホリスティックな働きかけと看做すこともできよう。

あえて理念的に類型化すれば、救いは知的・精神面に、治療は身体に物理的に働きかけるものであるのに対して、癒しは人間を一つの全体としてとらえ、精神にも身体にも訴えかけるものとすることができよう。」

(弓山達也『癒しを求める心と体』専修大

学出版局、2000) (※下線は引用者・以下このレポートの引用文下線はすべて引用者による)

近頃は「からだところ」という二元的な捉え方が、いろんな社会・文化現象を考えるとときにポピュラーな視点になっていますが、「癒し」とはそうした精神・身体のどちらをも包括的に捉え、働きかけようとするものだ、と弓山氏は述べています。私たちもしばらくは「癒し」について、なにか高尚な匂いのする宗教的「救い」よりもっと身体感覚として捉えやすいものであり、また「治療」という語感が持っているような、ある種硬質の専門的医療技術を連想させるよりはもっと日常感覚として感じ取ることの出来るものと考えておきたいと思います。

b 拡散する癒しの対象

「癒し」ということを考える場合にもう一つ触れておきたいことがあります。それは先ほど述べたように、癒しが求められ、その効力を発揮するのは現代社会のさまざまな局面でブームとなっているように、じつに多様なレベルでそのはたらきを見ることが出来るのですが、ここではそれをどのへんまで広げて考えておくかということです。

これについても弓山氏の著作をちょっと引いておきます。

「癒されるべき対象は実に広く、かつそれぞれに深刻である。こうしたある意味で無限定な範囲が、かえって癒しの性格をあいまいにし、概念規定を困難にしているのも事実である。しかも、癒しの体験は「今ここで」の救済の働きという意味において個別的で、極めて多義性・多様性に満ちている。だが、癒しの背景にあるような問題が解決されない限り、癒しへの関心は昂ま

ることはあっても、弱まることはないだろう。」(弓山達也、前掲書)

この指摘の通り、現時点の「癒し」の多義性・多様性は社会の変化と人々の要求によってさらに拡大してゆくと思います。そしてなかには宗教の本来的な意義とはますます縁遠くなってゆく部分も多くなってゆくものもあるだろうと思います。ですが、そうした場面すべてをここでは問題にしようと思いません。むしろ、情緒的な面あるいは生理的な面などで解消される癒しの意義は十分に認めながらも、私は仏教のもう少し中心的な部分においてはたたく癒しというものを問題にしたいと思っています。

仏教と言ってもこれもまたたいへん幅広く、仏教文化的な面から癒しということを取り上げようとすると、たとえば仏事儀礼のもつ演出効果による癒しも問題となるでしょうし、また仏教者の人情味あふれた布教法話によって受ける感銘や、古色蒼然とした仏像を目のあたりする感動も癒しのバリエーションの一つとして問題になるでしょう。でも、私が今日問題としたいのは、そうした仏教の考え方、あるいは仏教の教義そのものが持つ「癒し」の力を問題にしたいと思っています。というのは、私はこのさまざまに批判されることの多い仏教が、やはり根本的なところでは人に生きる力を与え、生かされている喜びを教えるも力を持つものだと思うからです。

そのことを述べる前に、これまでのセミナーを振り返りながら、あらためて私のスタンスを明らかにしておきたいと思いません。

【これまでのセミナーの軌跡】

a 地域の霊性の復活

秋田県内において精力的に民俗調査・研

究をされている斎藤壽胤先生のお話は、地域の葬送民俗のもつ癒しの力をテーマにしたものでした。地域社会における伝統的な葬送儀礼を行なうことによって、死の悲嘆が次第に癒されてくることを説き、伝統的共同体のもつ霊的な力の再活性化を唱えられているように、私は受けとめました。

「今日までさまざまな葬送に関する地域的な習俗が伝承されてきたが、それらは消えようともしているし、また、無くなったものも多い。しかし、改めてそれらを見直すと、ひとつひとつにある一定の意味があったことが分かる。かつては、その意味を重ねることによって安定がもたらされたのではなかったのか。換言するに、地域で死を受け入れるという民俗社会の習俗に見られる事象が、血縁以上に共同体社会内に潜んでいた癒しに通じていたと思われるのである。

地域における民俗文化的な葬送観念は、周りの自然とそれから神々、先祖、そして霊的なものを含めてひとつのコスモロジーを築いてきたものと一体となっていたはずで、それらを失うことによって不安と危機感が浮き彫りにされるのではないだろうか。民俗にある癒しや心なおしによって取って代わるターミナルケアといわずとも、死の安定は保てるものと考えます。(斎藤壽胤「秋田の民俗信仰と癒し」ビハーラセミナー2001/3/15 鷹巣阿仁広域交流センター 講演レジメ)

各地域に伝わる民俗的な葬送儀礼が、時として仏教教義による儀礼以上に地域住民の心の回復を促進させることは、実際にこの地方で僧侶として葬儀を行なっていると感じることがままあります。たとえば私の住む北秋田郡鷹巣町のある地区では、全部で十数戸という小数世帯集落で同じ年に複数の死者が続くと、遺骨を墓所に埋葬するとき、桐の木で作った人形を一緒に入れま



す。聞いてみるとそれは「もう死人はこれっキリにしてくれ」という意味を込めているのだそうです。

斎藤先生の言う、地域の民俗が社会や個人に対して持っている文化的な治癒力を再評価している点は私も賛成です。ただそれでは仏教という教えはそうした民俗社会の治癒力とは別に、もっと深いところで人間を癒す力をもってはいないだろうかと思うのです。、仏教ないしほかの宗教がそれぞれの教義によって人間に訴えてきたものは、民俗の社会の霊性を越える何かではなかったのかと思うのです。

b 宗教の力

秋田に初めて開設されたホスピス病棟の医長である嘉藤茂先生のお話は、末期ガンの患者さんとの実際のかかわり合いを通して、死を受け容れる患者さん本人やその御家族、そして冷静な医療行為と人間的な感情の間で揺れ動く病院側のスタッフのことなど、大変重く意義深いお話でした。御自身はクリスチャンであるという嘉藤先生がお話の中で宗教に触れて次のように語っています。

「宗教的な癒しというのは、医療に関わるものはふつう言及しないわけです。ですが宗教の持つ力によって、私達の弱さとか不確かな部分を受け入れて、解決してゆく。それによって楽になる、苦しみから解

放される、それが宗教的な癒しではないかと思います。

宗教的な癒しが成立するためには、求めることが必要だと思うのです。お坊さんや牧師さんが来てくれて話をすればそれで済むというものではないと思うのです。やはり最初の段階として患者さんであれ家族の方であれ、宗教的なこころのことを求めてゆくということが必要ですね。そしてその求めに応じて解決法を持っていらっしゃるはずの宗教者の皆さんの言葉、あるいは聖書、あるいは仏教関係の書物でもいいかと思うのですが、そういったものを「聞く」という、「求めて聞く」ということが必要だと思います。そして聞いて、自分の頭で考えて、なるほどなあと「受け入れる」ということがあると思います。あるいは信じるということがある。それによって自分の心の深いところの傷が癒されるということがあると思います。あるいは自分を認めることができる。また解放されるということが出来る。そういった心の解放といったことが宗教によって生じるのであれば、これほどうれしいことはないと私は思います。

そうしたことが起こるために、私達自身の心の中にあるものにもっと注目してよいと思います。そして宗教というものが提示してくれるものにもっと関心を向けていいのではないかというのが私の思いです。

ここで宗教家の方々に申し上げたいのは、信じていらっしゃる教えが素晴らしいものであれば、その素晴らしいものをその方々だけで独占しないでほしい。もっと私達に提示してほしい、教えてほしい、そう思います。できればガンとか末期を迎えた病気の患者さんはもちろんですが、もっともっと元気なうちにそうしたものと触れる機会があればいいのではないかと思うわけです。」（嘉藤茂「あなたらしく最期まで過ごしていただくために－外旭川病院ホス

ピスの取り組みー」ビハーラセミナー
2001/5/27 鷹巣阿仁広域交流センター 口
頭発表をリライト)

私はこれを聞いたとき、医療者として宗教に対する極めて謙虚で良心的な期待を述べられていることに感謝と敬意を感じました。そして我が身を振り返って、それでは僧侶である私は、人に対して「傷を癒し」「心を解放」できる教えを、「提示し」「教え」しているだろうか、と反省させられました。嘉藤先生の宗教に対して期待されているものが、先ほど私の述べた「もっと深いところで人間を癒す力」に当たるものだろうと思うのです。

○ “ホトケ” から “仏” へ

「信仰と癒し」を私たちのテーマに掲げようとしたきっかけとなった駒沢大学名誉教授・佐々木宏幹先生のお考えを、ここで振り返っておきたいと思います。宗教人類学の泰斗として知られる佐々木先生は、日本仏教の性格をアジア諸地域の仏教文化圏との比較から、その特性を整理されたうえで、次のように民衆の側の信仰と、それを踏まえた仏教者の役割を述べています。

「愛する人と死別して悲嘆のどん底にある人が、位牌を仏壇に祀ることにより、仏と成った故人と同じ空間に共存することのグリーフ・ワーク（引用者注、悲しみの修復作業）的な意味は実に大である。ホトケと感応道交することで悲嘆の苦しみは癒され、生き続けてゆく力を与えられるからである。

しかし、このように人々が“ホトケに出会う”ことは仏教信仰の出発点ではあっても終着点ではないと考える仏教関係者は少なくない。仏壇には本尊である“仏”の像が奉祀され、人々の信仰はホトケ（位牌）を介して仏（仏像）へと導かれなければな



らないからである。さらに本尊信仰が本尊信仰で止まるのであってはなるまい。それは実質的には神信仰と大差ないと言えるからである。本尊信仰が深まり高まって真の仏教信仰に至るためには“仏”が体現した無常・無我の思想が、人々の生死観の基軸にならなければなるまい。この“ホトケ”から“仏”への転回のための努力こそ、仏教者の究極の使命であると考えられている。」（佐々木宏幹 『仏と霊の人類学-仏教社会の深層構造-』春秋社、1993）

佐々木先生の言う「“ホトケ”から“仏”」へとは、「民俗信仰から教義信仰」へということを意図しているように思われます。つまり民俗社会の中で癒されているレベルから、さらに仏教思想の中核である教義レベルにおける救いの段階まで誘うことが仏教者の役割ではないかと言われているのだと思います。

ここで、仏教の教義について私なりのスタンスを述べておこうと思います。仏教教義とは高度な哲学的思索の産物であって、一般の人間が日常的なレベルでは到底そこに触れることは困難であるという考え方があります。しかし、仏教そのものも本来は生身の人間によって産みだされたものであります。ゴータマという一人の人間がさまざまな悲しみと苦しみの体験の中から生み出してきたのが「仏の教え」すなわち仏教教義であったと思います。とすれば私たちは「教義」の中に含まれる人間的な側面

にもっと期待していいのではないのでしょうか。たしかに仏教経論の中には煩瑣で緻密な哲学的思弁によるものは数多くあります。ですが、ブッダとなったゴータマを慕い敬った人びとは、その思索の高度な哲学性を崇敬した人ももちろんいたでしょうが、ブッダの口から語りだされる人間の真実をつく言葉に、自らの人生の大きな困難から救われ、そのことによって彼に帰依した人びとも少なくなかったに違いないと思うのです。

佐々木先生が言うように、「癒し」の用途は民俗信仰的な「ホトケと感応道交すること」に限定されないのでしょうか。私には「“仏”が体現した無常・無我の思想が、人々の生死観の基軸にならなければなるまい」という表現は、仏教教義に対する理想化・モデル化の姿勢が感じられます。そのことはかえって「教義」を現実の人間から遠ざかったところに押しやり、狭く限定されたものに相対化してしまうのではないかと思うのです。

d 「信仰と癒し」という問題の問題点

以上に「信仰と癒し」というテーマをめぐるこれまでの諸先生のお考えを私なりに紹介してきましたが、以下のようなまとめをしておきます。

1. 近年ブームになっている「癒し」とは、もともと文化人類学の領域で注目され始めたのがきっかけである。
2. 文化人類学が得意とするのは、一見複雑混沌として見える文化現象を明解な二つないしそれ以上のモデルによって腑分けし捉えてゆく手際の鮮やかさである。
3. 宗教における癒しの問題はこれによって、知的・理念的な救い（あるいはさとり）と、それと対象的な感覚的・情緒的なものまでをふくむものとしてモデル化され、

性格づけられて来た。

4. このモデルは「癒し」の機能する場所を宗教の中心的な教義というよりも、その周辺・民俗文化・タマ信仰・各種儀礼や空間のヒーリング効果ほか-に広げて理解させてきた。

5. しかし、仏教は本来「生・老・病・死」の四苦を根本の課題においてきたことでわかるように、悲苦にたいしてどう向きあうかということが最重要の問題である。つまり仏教教義の周辺にある「癒し」機能を論じる以前に、仏教教義の中心において「悲苦」についてどのように論じられているか、それがどのように現実に反映できるかを考察することが先だと思われる。

6. そのことは〈知的／静的／理論的／観念的〉と捉えられがちだった仏教教義を、もういちど「悲しみ」の発生する場に引き寄せ、より生きた人間に直結する〈情的／動的／現実的／人間的〉問題として「仏教」を捉えなおすことにもなるだろう。

7. とりもなおさずそのことが、医療現場を始めとするさまざまな分野で宗教者達に求められていることではないだろうか。

【「悲しみ」の意義】

a 悲しみが導く真実のさとり

故人との死別の悲しみを修復してゆく作業（グリーフ・ワーク）が、たとえば仏壇に位牌を祀ることにある、と先ほどの佐々木先生の文章に見えました。このほか臨終を起点に繰り返し行われる追善供養も、その法要の依頼主である遺族にとってグリーフ・ワーク的な意味合いの強いことが指摘されています。新しく亡くなったお父さんの位牌を先に亡くなったおじいさんやおばあさん達の位牌と同じところに祀る、するとみんな一緒になるんだなあと安心する。

あるいは悲しみのどん底にあった死別の日に比べて、一年、三年と時が過ぎるにしたがって気持ちも穏やかになってきた、これもお坊さんのお経のおかげだなあ、などと思う。それらは位牌を祀る、追善供養をするという行為の本来的な意義とは別に、遺族が情緒的な安らぎを見いだしてゆく過程ですが、それでは仏教は死の悲しみに対してどのように説いているのでしょうか。

仏教諸教典の中で特に重視される經典に『法華経』がありますが、その「如来壽量品」の一節に「良医の譬喩」の話があります。そこを見てみましょう。

「そこで（よい医者は、毒を飲み苦しんでいる自分の子供達に向かって）次のような言葉をなした。（引用者注、子供達の中には、毒が回ったために本心を失い、医者である父の調合した良い薬を飲もうとしない者たちもいた）

“汝たちよ、必ず知らなければならない。私は今はもう老い衰えて、死の時がすでに迫っている。この良いすばらしい薬を今ここに止めておく。汝よ、それを取って服用しなさい。病気は治らないのではないかと心配することがないように。”

この教えをなし終わってから、また他の国へ出かけて行って、使いを遣わして、その者に帰国して告げさせた、“汝の父はすでに死んだ”と。このとき多くの子供達は、父が自分たちの意図に反して死んでしまったと聞いて、その心が多に憂い悩んで、心に次のように思った。

“もしも父がおられたならば、私達を慈しみ哀れんで、よく救い護って下さったであろうに。今は私を捨てて他国で亡くなってしまわれた。自ら考えてみると、もはやみなし児であって頼りとするものがないのだ。”

こうして常に悲しみの感情を懐き、本心が終に目覚めたのである（常懷悲感、心遂

醒悟）。こうしてこの薬の色も香りも味もうまいことを知って、早速とってこれを服用したところ、毒の病はみなすっかり治ってしまった。その父は、子供たちがことごとく全快す

ることが出来たと聞いて、やがて帰ってきて、すべての子供たちを見ることが出来た。」

この譬喩はなかなか見つけることの出来ない真実の教えに目覚めるところにポイントがあると思いますが、死の悲しみにくれる人にとっても大きな意味があると思います。私たち僧侶は突然の肉親の死によって悲しみの淵に突き落とされた人をしばしば相手にします。おごりな言葉がいかに無力かということを知りながら、口にする言葉がほかに見つからないときがあります。そんなときに「悲しみを常にいだき続けるものは、真実に最も近いところにいる」という法華経の教えほど大きな救いになるものはないと思います。悲しみを逃れる術をこの譬喩は教えているのではないのです。むしろその悲しみが真実に到るためにいかに大きな意義があるかということを教え、悲しみに沈むことを深く優しく肯定しながら、その先に待つものが不幸なるものではないことを教えてくれているのです。「悲苦」自体に大きな人生の意味を認めることが出来るのです。

b ボサツの悲しみ

仏教を信仰するものの理想的なあり方として「ボサツ」の生き方を説く松本史朗氏は、宮沢賢治の詩にあらわれる『法華経』への信仰について次のように述べていま



す。

「『雨ニモマケズ』の詩は、その最後に近づくにつれてしだいにやや悲痛な調子をおびてくる。

“ヒデリノトキハ ナミダヲナガシ サムサノ夏ハ オロオロアルキ ミンナニデクノボウトヨバレ ホメラレモセズ クニモサレズ”

これを読むと私は、どうしてえらい人がこうも、悲しいのかなんでみんなにデクノボウと呼ばれなければならないかと、不思議でもあり、かわいそうにも感じたものである。(中略) 賢治の文学は、『法華経』への信仰、いな、『法華経』の一語一語の言葉なしにはありえないことが理解されるであろう。私よりみれば、『雨ニモマケズ』の一篇ほど、現代の日本語で、菩薩の生き方を完璧にえがききった作品はない。現代の日本語でということは、私たち自身の生き方としてという意味である。この詩には、菩薩とは苦しむ人であり、また、働く人であるということがよく示されている。」(松本史朗『仏教への道』東京書籍出版 1993)

人のためにつくし、人のために悲しみ、人のために働く、法華経が理想とする信仰者の姿はこれであり、その人を「ボサツ」と言います。釈尊の前生物語として知られる『ジャータカ』は何百回も生まれかわり死にかわりしながらボサツの生き方を貫く釈尊の過去世の姿を描いているものでした。松本氏が明らかに言い当てているように、私たちの現実の悲しみや労働が、法華経という仏教の教義によって輝く意義を与えられてゆくのです。

○ ボサツという生き方

ふつう「ボサツ(菩薩)」とは「仏」に対して一段低い位にあって、仏にはならず

衆生を済度しようとするものを言います。大乘仏教が、そして宮沢賢治が理想とするのがこの「ボサツ」という生き方でした。再び松本氏の著作を引いてみます。

「菩薩とはなにか。悟りを求める人とはなにか。さとりを求める人は、修行によって自己を浄化していき、ついにはさとりをひらいて仏になるのであろうか。注意すべきことは、さきの『八千頌般若経』からの引用ではこのような直線的な、または向上的な修行のあり方は、まったく問題にされてもいないということである。それでは、そこになにが説かれているのか。菩薩の智慧の完成は認識することも、とらえることも出来ない、と、このように知ることが智慧の完成である。これがその要旨であろう。さとりを求める人も、さとりもない、というのがさとりであるならば、ここに人間をさとりのための手段とみる見方が否定されて、人間はいわばさとりのための目的であるという考え方が成立することになる。このような立場にたてば、すべての人間の生活、労働、苦しみや悲しみや愛が、価値あるものとしてふたたびよみがえってくるのである。したがって、すべての人が各自の労苦においてさとりを求めているという見方も、すぐに成立するであろう。」

(松本史朗 前掲書)

修行という名前の階段を延々と登って行ったその果てにさとりがあるのではありません。私たち自身の生活、労働、よろこび、悲哀のすべてが、そのありようにおいてさとりに向かうものとして貴い価値を持っている、というのです。私はこの松本氏の言葉に共感するものです。

ボサツの生き方が、今日私の言う「仏教という生き方」を説明することになるのですが、これをもう少し違う方向から述べてみます。

【無限の時間の中の もろくてたしかな「わたし」】

a 「わたし」がいまあるということ

『舎利礼文（しゃりらいもん）』というごく短いお経があります。その一節にある次の言葉はとても大切なものだと思います。

仏、加持するが故に、我、菩提を証せり。

仏、神力をもって、衆生を利益す。
菩提心をおこし、ボサツの行を修す。

（舎利礼文）

「仏、加持するが故に」とは、仏が衆生のことを思って一心に加護を祈ることです。「菩提を証せり」とは、さとりにいたること。

つまりこの一節は「仏が私のために一心に加護を祈ってくれたおかげで、私はさとりをひらくことができた。仏はその神秘なる力をもって衆生を利益してくれる。それゆえに菩提へ向かう心をおこし、ボサツの行を修するのだ」というように解釈できます。

私がさとりをひらくことができたのは、私の努力によるのではなくて私の見知らぬところで加持してくれていた仏の力によるものだ、と言うのです。もう少し言えば、私が今あるのは仏の加持の故であり、ここにあらしめられた私が仏と同じように菩提の心をおこしボサツの行に駆り立てられてゆく、とも言えるでしょう。この、私が成し遂げる行為はじつは過去における仏の力によるものだというモチーフは仏教の中で頻繁に登場するものです。

そしてこのことを「利他」という面から明解に説きあかしたのが、次項の道元の言葉でした。

b ボサツの願いによって 支えられる「わたし」

「自未得度先度他」という言葉があります。これは「おのれいまだ渡らざるに、先ず他を度す」と読んで、自分の利益よりも他人の利益を先にしなさい、という意味に理解されています。またその意味から慈善事業やボランティア活動の精神に類似するものだという説明をしばしば耳にすることがあります。仏教で言う「利他」のことだというわけです。

しかし次の道元の言葉を読むと、ここで言われる「利他」とはもう少し深い意味がありそうに思われます。

「この発菩提心、おほくは南洲の人身に発心すべきなり。（中略）あるいは無量劫おこなひて、ほとけになる、あるいは無量劫おこなひて、衆生をさきにわたして、みづからはつひにほとけにならず、ただし衆生をわたし、衆生を利益するもあり。菩薩の意樂にしたがふ。おほよそ菩提心とは、いかがして一切衆生をして菩提心をおこさしめ、仏道に引導せましと、ひまなく三業にいとむなり。いたづらに世間の欲樂をあたふるを、利益衆生とするにはあらず。」（道元『正法眼蔵発菩提心』）

「衆生を利益す、といふは、衆生をして自未得度先度他のところをおこさしむるなり。自未得度先度他の心をおこせるちからによりて、われ、ほとけにならん、とおもふべからず。たとひ、ほとけになるべき功德熟して円満すべし、といふとも、なほめぐらして、衆生の成仏得道に回向するなり。」（道元、前掲書）

「菩薩の意樂」の「意樂」とは「いぎょう」と読み、願いという意味です。

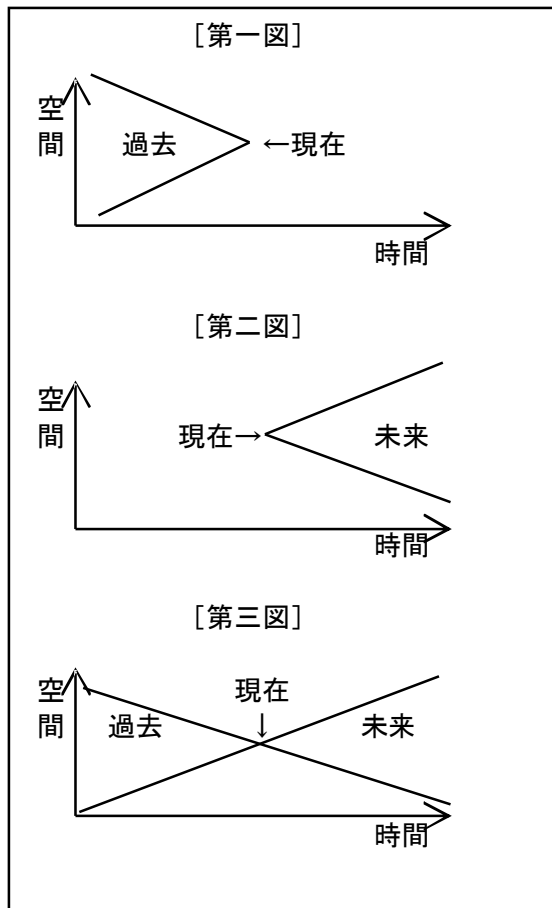
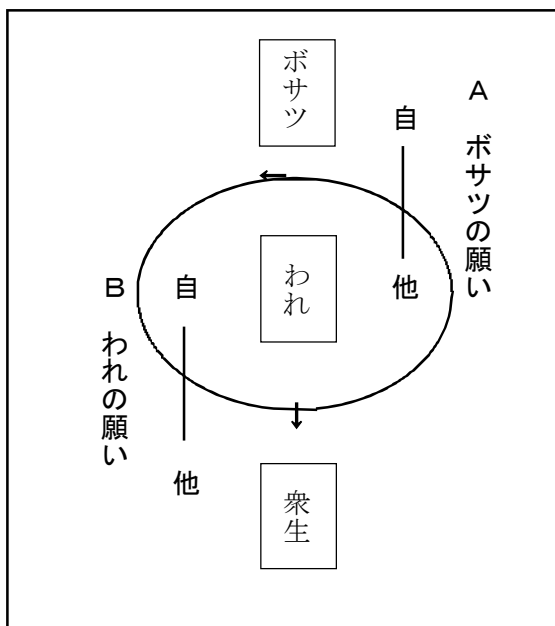
衆生をして自未得度先度他のところをおこさしむる」ということは、今ここにきざしている私自身の「菩提心」や「自未得度

先度他のところ」もまた、誰かによって引き起こされたものだということになります。その誰かとはほかならぬ「ボサツ」その人でしかありません。

ここで図のような構造を考えてみて下さい。私は道元の解説から「利他」とは次のような二つの時間・場面によって構成されていると思います。

まずは「Aボサツの願い」の部分ですが、ここではボサツが自未得度先度他の発願をなしてわたしを利他してくれます。これによってボサツの利他とはわたしに菩提心をおこさせることです。菩提心をおこしたわたしはさらなる利他のために自分以外の衆生に利他の矛先を向けます。これが「Bわれのねがい」で示した部分です。つまり「われ」を中心に見れば、われはボサツによって利他される対象であり、次いでわれのボサツの行によって衆生を利他する主体であるということになります。ここに、先ほどの『舍利礼文』の一節がよく重なり合ってくるのが分かっていただけるとと思います。

このようにボサツの願によってささえられ、自らの願によって衆生をわたそうとする「われ」とはどんな存在なのでしょう



か。

次の三つの図のうち第一図をご覧ください。いま・ここにある「われ」というのは図のように時間と空間を二つの座標軸にした場合ただの一点にしか過ぎません。しかしこの一点を支えるために無限に遡り広がりゆく過ぎ去った時間がありました。これを仏教では過去世と言います。

また第二図は、「われ」の一点から始まるこれからの時間を示したものです。いま・ここにある「われ」はほとんど頼りなく小さな存在ですが、ここから始まる未来は果てしなく限りなく広がりゆく可能性に富んでいます。これが未来世というわけです。

現在のわたしを支えてくれるさまざまな縁（えにし）が過去世であり、わたしが何かしらの機縁となって展開してゆくこれか

らの時間が未来世です。その様子を第一図と第二図を合わせて第三図のように示しました。今の自分は非常に頼りなげで、一個の人間のいのちは露のいのちにもたとえられる通りもろくはかない面があります。しかし同時にわたしを支えてくれた膨大な過去の時間はけっして軽んずることの出来ない大いなる意義をもって今のわたしをここにあらしめてくれています。同時にいま・ここにわたしが確固としてあるということそれ自体が、これからさまざまな機縁を生じて展開してゆく未知の、けれども豊かな未来の芽吹きになっているのです。

こうした「わたし」のはかなさと大切さを教えてくれるのが仏教だと思うのです。過去のボサツによってささえられる現在の「わたし」、その「わたし」からはじまりゆく未来。この過去・現在・未来の三世をつなぎゆくのが「ボサツのねがい」であるとすれば、この「ねがい」を生きるのが、仏教を信じる私たちのあるべき生き方ということになるでしょう。

そのように信じるときに私たちの心にあふれる自信・充足感・安心というものが、仏教を信じるものにとっての癒しと言えないでしょうか。この意味において私は「癒し」ということを、ストレス解消の〇〇セラピーというような意味合いではなく、たしかな教えと信仰によって、その人をより活力あふれた「生」へと導いてゆく力を生み出すものと捉えておきたいと思っています。

【生き方としての仏教】

すでに前節において私の結論はお話ししましたので、ここでは余談めいたこととなりますが、仏教を「生き方」として捉えてゆくために、最後に触れておきたいことがあります。次に紹介する文章は仏教、とり

わけ禅が現代社会において人間の生き方についての寄与できるかということをテーマにしたシンポジウムで、駒沢大学前学長の奈良康明先生が講演された一節です。

「結論を先に云うと、私は、禅、仏教は元来、社会的ではない体質を持っている宗教である、と云うことをもうはっきりと認め、その上で仏教者と社会との関わりを考えるべき時代になっていると、思っているのですが、そのために、宗教の機能と言うところから考えてみたいと思います。

宗教とは何か、と言うことになりますと話が大きくなりすぎます。宗教の定義はそう簡単ではありませんから。しかし、私は森岡清美先生の定義がバランスのとれた良い定義だと思うものですから、そこからスタートさせていただきます。

“（宗教とは）心理的・精神的安定を与え、生の意味付け、つまり生きがいを回復させ、また連帯を再発見させ、更に新しい価値観のもとに、退行から前進へと人々の姿勢を転化させる機能（をもつ）。（森岡清美編『変動期の人間と宗教』未来社、1978）”

と、こういうふうにおっしゃってるわけです。大変包括的な定義でございます。仏教にもキリスト教にも当てはまる定義だと思いますけれども、しかし、共通して、ここで基本的なこととして言えることは、私達人間が人間として生きていく、その生きていく上での「意味」の探求が宗教だということを示されています。」（奈良康明「禅の社会性と思想性をめぐって」『宗学と現代』第4号 曹洞宗総合研究センター 2001/3）

ここに奈良先生が仏教・禅の社会内機能の



脆弱さを認めたくえで、さらに宗教として社会との関わりをあらためて考えてゆく場合に有効ということで引かれている森岡先生の宗教の定義は、私たちビハーラにとっても大切な指針を与えてくれることになると思います。

ビハーラの目指してきたことは、ひとことと言えば仏教の社会的可能性の模索であったように思いますが、いまだに右往左往、あっちへうろうろこっちへよろよろといった状態のようにも思われます。

まったくの独善ながら奈良先生の反省と森岡先生の定義をかりて、たとえば、「ビハーラとは、たしかな教えをささえに、心のやすらぎをあたえ、生きがいを見だし、人と人とのつながりを大切にし、いつも前向きに、生きてゆくことの意味を

探し求めることを目的とする活動である。」

などと私たちの目指すところを定めてはどうだろうなどと考えたりいたしました。

今日の話は、どうもカタイ方に流れたみたいでさぞお退屈であったろうと思います。最後、私の勝手なビハーラへの気持ちまで話してしまいまして失礼しました。

御静聴に感謝します。



ビハーラ10周年 特別企画

お伝えしたとおり、今年はビハーラ結成10周年を迎え、その記念行事を現在計画中です。

- ◆期 日 9月16日（月・振替休日）
- ◆場 所 鷹巣町中央公民館
- ◆内 容 佐々木宏幹先生を中心とするシンポジウム
- ◆テーマ 死と葬送を経て生きる力へ（成文化できるテーマは未定）

一緒にやったらどうかなということは…

- ・ビハーラ十年間の活動記録をパネル展示
- ・ダイジェスト版の頒布
- ・佐々木先生第2回講演会の講演録頒布
- ・ビハーラ会員が関わっているボランティアグループの紹介
- ・いのち・宗教・医療・福祉に関わる関連諸団体の情報提供 …等々

これまで2回お越しいただいた佐々木先生をもう一度お招きし、ビハーラのこれまでを再点検する主旨のシンポジウムを中心に、様々な企画でパアッといきたいと思えます。まだまだ皆さんのご意見・アイデアをお待ちしていますのでどしどしお寄せ下さい。